

I I A S NEWSLETTER

International Institute for Advanced Studies

October 2009

68

 財団法人
国際高等研究所

<http://www.iias.or.jp>

I N D E X

報告	研究活動報告(8月1日～9月30日)
巻頭言	自由闊達な「ゆとり研究」のフォーラムを～副所長就任にあたって
紹介	高等研プロジェクト紹介 ③
紹介	高等研フェロー事業活動の紹介 ②、③
報告	2009年研究プロジェクト「隙間の組織化」夏のワークショップについて(9月5日～11日)
報告	サウジアラビアへの旅：旅行記 国際高等研究所 所長 尾池和夫(9月23日～26日)
紹介	高等研選書22「地震を知って震災に備える～京阪奈地域を中心として～」を刊行
報告	高等研WEBサイトをリニューアルしました(10月1日)
IIASカレンダー	●研究活動(10月1日～12月31日) ●公開講演会の開催
お知らせ	●車椅子を購入しました

報告

研究活動報告(8月1日～9月30日)

研究プロジェクト

研究プロジェクトのタイトル	開催日	研究代表者	参加者数
ナノ物質量子相の科学(幹事会).....	8月22日(土)	金森順次郎	6
ものづくりにおける実践知を体得した人材の育成と継承に関する調査研究.....	8月26日(水)	岩田 一明	7
女性研究者と科学技術の未来.....	8月28日(金)～29日(土)	伊藤 厚子	18
フェロー研究会「大学法人化のもとでの地学教育の現状と将来」.....	8月28日(金)～29日(土)	竹本 修三	10
フェロー研究会「国際ビジネス法務研究会」.....	8月29日(土)	松岡 博	19
天地人-三才の世界:宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造.....	9月1日(火)～2日(水)	尾池 和夫	17
数量的アプローチによる日本経済の比較的研究.....	9月2日(水)～3日(木)	宮本 又郎	23
ナノ物質量子相の科学.....	9月4日(金)～5日(土)	金森順次郎	54
すきまの組織化(ワークショップ).....	9月5日(土)～11日(金)	鳥海 光弘	23
研究成果の取りまとめ会合「19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究」.....	9月11日(金)～12日(土)	吉田 忠	7
第15回コンピューショナル・マテリアルズ・デザイン(CMD)ワークショップ(於:大阪大学).....	9月14日(月)～18日(金)	赤井 久純	69
21世紀における文化としての設計科学と生産科学.....	9月18日(金)～19日(土)	岩田 一明	10
スズマとシステム-知のあり方.....	9月25日(金)～26日(土)	亀本 洋	13
フェロー研究会「生命の本質-遺伝子、遺伝暗号、タンパク質および生命の起源」.....	9月25日(金)～26日(土)	池原 健二	9



国際高等研究所 副所長

田中 成明

本年4月から副所長に就任いたしました。以前に尾池先生のもとで大学や財団の運営のお手伝いをさせていただいたということもありますが、何よりも、本研究所には、今世紀初めに企画委員に加えていただき共同研究プロジェクトを組織して以来、その活動方針・スタイルに共感しながら関与し続けていたことから、ほとんど二つ返事でお引き受けした次第です。

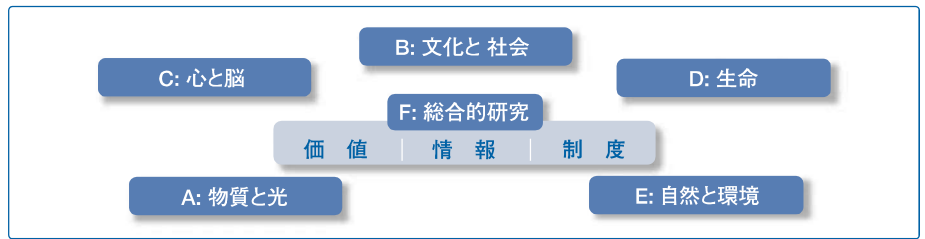
本研究所の存在理由というか魅力は、学術全般にわたって分野や世代の異なる研究者の自由闊達な対話交流によって、基礎的・原理的テーマを協働して研究し、新しい学術の芽を見つけ育ててゆくことだと理解しております。

私の専攻は、法哲学という、法学のなかではかなり特殊な分野で、自分の研究を進める上で、理論と実務の連携や隣接分野との交流が不可欠だったこともあり、法律・行政などの実務家や人文・社会科学系研究者とは若い頃から接触して多くのことを学んできました。その後、かなり歳をとってから生命倫理問題や環境安全問題に職務として関与するようになったり学術会議会員となったりしたことをきっかけに、自然科学系研究者との交流も急速に増え、新鮮な知的刺激を受け続けております。

このような個人的な体験から、異分野の研究者と意見交換し議論することは、個人的に視野を拡げそれぞれの研究を進めるのに有益この上ないのですが、それを活かした一定の成果がまとまるまでには相当の試行錯誤的な醸成期間が必要で、学際的共同研究自体から何か具体的な成果・効果を直接的・短期的に生み出すのは、とくに基礎的・原理的なテーマであればあるほど、なかなかむずかしいと痛感しております。この種のいわば「ゆとり研究」が、科学研究費をはじめ公私各種の研究助成の対象とらしくなっており、残念です。本研究所が、中長期的な知の再編と刷新をめざす挑戦的な共同プロジェクトを重点的に支援し、学術の持続的発展の拠点としての役割を果たし続けることを願っています。また、知の再編と刷新のためには、世代間交流による知の持続的な伝承も不可欠であり、共同プロジェクト編成において、異分野接触だけでなく、老壮青が忌憚なく自由に議論しあえる対話フォーラムの提供ということにもいっそう留意してゆくべきだと考えております。

本研究所は、国際的な研究の推進ということも活動方針としてきておりますが、残念ながら、大規模な国際的連携研究は、財政的制約もあってむずかしくなっている観があります。しかし、とくに社会・文化、政治・経済などの分野における稔りある国際的な共同研究には、欧米だけでなく、東アジア諸国との交流が不可欠で、今後ますます重要となってゆくと予測され、その充実をはかる工夫をする必要を感じております。

微力ながら本研究所の研究活動をいっそう発展させてゆくことに努めさせていただき所存です。ご指導とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



区分F. 総合的研究 「すきまの組織化」 (2007～2009年度・3年次)

研究代表者：鳥海 光弘

高等研企画委員・東京大学大学院新領域創成科学研究科教授



「すきまの現象学から、隙間の組織化へ」

今年度は隙間の組織化の最終年度である。すでに2003年度に「すきまの現象学」のプロジェクトを立ち上げ、3年間の研究を継続し、その後、あらたに「隙間の組織化」プロジェクトを開始し、現在に至っている。

この2つの研究プロジェクトでは、主題はすきまである。いろいろな学問分野からのすきまに対する見方はかなりはっきりしていて、すきまとは学問分野の対象となる自然、社会、人間、人工物などの成立する枠組み乃至はモデルがつくられると、それから外れる部分が常に現れ出る、その部分のことを指している。さらに、ここで言うモデルが複数ある場合でも、それらのモデルとモデルの間の領野をすきまと呼ぶ。このため、すきまこそが、多様な、またはあらたに湧き出してくる、新規性、創発性をその中にその根拠を求めることが出来るものであると考えられる。

すきまが、そのように対象化されている自然や社会の諸現象のさまざまな多様な現れに対して、常に随伴して存在していることは、一方で、すきまを介在することによって、別の現象や事象をも伴いつつ、現れ出ることにはかならない。そして、それらが、すきまを舞台にして相互に干渉し、相互浸透し、混合することが、多様な現象を作り出す原因なのではないかと考えられる。そして、すきまがどのようにして自然や社会のあるひとつの現象と、随伴するもう一つの現象の間を連結しているのが、多様化または多様性の生ずる根拠を探ることにつながる。

現象あるいは事象が、すきまをともなってもう一つの随伴する現象と対になっているとき、それが時間順序的に対なのか、それとも空間配置で対なのかで大いに異なる。前者では通時的なすきまであり、後者では共時的なすきまとなる。ここで言うところの随伴する対は、たとえば私の想起する猫についての考えと、その猫という私とは切り離された実在についての考えである。そしてこれら2つの考えの間には必ず発生するであろうすきまが存在する。そして、そのためにこそ、その猫が見知ったトラ男なのか、ミケ女なのか、といった多様な存在が現れてくる。そして確認出来るならば、それは一つに収斂するが、それでも猫一般とその猫との対とその間のすきまは存在し続けるのである。

こうして見ると、ここで言うところのすきまは、ハイデッガーのいう現存在と存在との間におけるすきまに對置されるだろう。彼は、存在は世界内存在であり、時間的存在つまり歴史的存在という。その世界内存在は周囲との関係性を時間順序的につながりをあらかじめそのうちに保持している。ハイ

デッガーはこのような世界内存在を、なんらかの仕方で時間的世界とのつながりを排除したかたちで存在を確認することが科学研究であるという。一方で、つながりを残した現存在、または個別的物事の在りようを探求するのをフッサールの現象学的探求と指摘した。

われわれは、改めて、時間順序的な世界内存在がもつ周囲とのつながりの総体をすきまとよぶ。また、このすきまはそれぞれの個別存在である現存在にも世界内存在との間にすきまを発生させている。このような関係性を別な表現で考えて見よう。もとのすきまに戻るような形で形成されるすきまであるならば、それは自己投影でしかないだろう。その場合では元と新しいすきまが同一であるということなので、変化しないすきまということになる。普遍的なすきまだろう。一方、先ほど述べたように存在が時間そのもの、つまり歴史的存在であるために、元のすきまから派生するすきまは時間順序的にならざるを得ない。そのことからすると、共時的なすきまはより個別性をもつ現存在に随伴したものであり、さきほどの猫の話では、ミケ女かつトラ男が未定状態のすきまに対応するのだろう。しかし、それでも残る、猫のイメージは時間順序的に更新され、そのことによって、過去のイメージとの間にすきまが形成されることになる。これが時間順序的なすきま、つまり通時的なすきまの存在との関係性である。

以前に、切り離せない自然という存在はさまざまなつながりを持つ個別的な存在の総体であり、個別事象がさまざまな時間と空間のなかで、切り離されて繰り返し起こるとき、それが個別存在として現前するとした。そしてその世界における個別存在を保証する存在としてのモデルを設定した。このようにして主体的、かつ客観的時空世界を分離したとき、あからさまにそれらの3種の存在にすきまが発生するということを提起した。この3種の存在とそれらのすきまは、さきのハイデッガーの2種の存在、世界内存在と現存在と、彼のいうところの科学的存在、つまり周囲とは切り離された現存在、それは共時的現存在というべきものを加えた存在の間のすきまに対応する。

このようなすきまの考察は、いろいろな分野における客観的実在の存在様式の捉え方、主体を通しての周囲のあいだのつながりと多様性の解明、非線形世界の多様性の現れ、個別性を通観した超越性の解明などからの総合的な検討から、すきまの組織化こそが非常に重要な、多様性発現とその意義をとらえることの契機となることが示された。そしてそれこそが、時間順序的に完全には規定されない、すなわち自由を保持する存在としての、人間存在の根幹になっているのであろう。

「国際私法の新しい流れを求めて」 松岡 博

国際高等研究所フェロー・帝塚山大学教授・大阪大学名誉教授

昨年の11月から、高等研フェローに選任され、高等研の恵まれた贅沢な研究環境の中で研究活動に従事しています。昨年3月に帝塚山大学学長の任期が終了したとき、金森前所長から、高等研フェローのお話があり、このように静かで恵まれた高等研の環境で研究できることを大変うれしく思って、有り難くお引き受けいたしました。金森先生が大阪大学総長時代に、私が学生部長、法学部長、初代副学長を務めていた関係もあって、先生からご推薦を頂いたのではないかと考えています。

専攻は、国際私法・国際取引法という分野で、大阪大学の大学院生の頃からですから、もう40数年になります。とくに国際私法規則の構造はいかにあるべきか、国際私法の目的、価値はなにか、といった基礎理論を中心に研究を進めてきました。学位論文は、『国際私法における法選択規則構造論』です。その後は、その基礎理論を踏まえて、『国際取引と国際私法』『国際家族法の理論』『国際私法・国際取引法判例研究』などの研究をしてきました。大阪大学の最終講義では、『国際私法の新しい流れを求めて』というテーマで、一応の区切りをつけました。帝塚山大学に移ってからも、その気持ちは変わりませんが、最近は、もう少し研究の幅を広げて、「交渉学」に関心をもっています。

高等研では、長いときは、10日程度、短いときは4日程度と集中的にけいはんなプラザホテルに連泊して、執筆中の本の原稿を書くという仕事をしています。普段は、なかなか集中して時間をとるのが難しいので、高等研でこのような形で研究執筆活動を静かな環境でほかの仕事に煩わされることなく続けられるのを大変ありがたいと思っています。今年度中に『アメリカ抵触法(下巻)』(LexisNexis社)と『アメリカ国際私法・国際取引法判例研究』(大阪大学出版会)の2冊を完成し、刊行する予定です。後者は、上記の日本の判例研究と対をなすものです。

フェロー研究会としては、上記の『アメリカ抵触法(下巻)』の共同翻訳の最終打ち合わせの研究会を、第2回目のフェロー研究会は、私が会長をつとめる「国際ビジネス法務研

究会」の研究報告会を行いました。第3回目のフェロー研究会としては、新しい国際取引法の書物の打ち合わせ研究会を11月に予定しています。

来年度からの研究計画としては、高等研の研究プロジェクトの1つとして、「交渉学の可能性」というテーマでの共同研究を提案をしたところです。学際的、国際的な見地を踏まえて、新しい交渉学の可能性を探求したいと思っています。



研究個室前
ベランダにて

・略歴:

1939年生まれ 大阪大学法学部卒業、ハーバード・ロースクール客員研究員、大阪大学法学部教授、法学博士、大阪大学総長補佐、大阪大学学生部長、大阪大学法学部長、大阪大学副学長、大阪大学留学生センター長、大阪大学名誉教授、帝塚山大学教授、帝塚山大学法政策学部長、帝塚山大学学長、帝塚山大学国際ビジネス法務塾塾長

・学会・社会活動:

大阪家庭裁判所調停委員、大阪府地方労働委員会公益委員、国際私法学会理事、国際法学会理事、司法試験考査委員、学術審議会専門委員、大阪家庭裁判所委員、国際経済法学会常務理事、大阪大学出版会会長、法制審議会国際私法部会委員、中央労働委員会近畿地区調整委員長、国際私法学会理事長、日本学術会議会員、法制審議会国際裁判管轄制度部会委員、大阪市人事委員長、大阪大学経営協議会委員、大阪大学総長選考会議議長、国立大学等教育研究評価委員、大阪市立大学外部評価委員

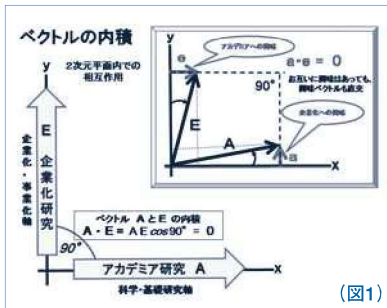
・主要著書(単著):

『国際私法における法選択規則構造論』、『国際取引と国際私法』、『国際家族法の理論』、『国際私法・国際取引法判例研究[新版]』、『アメリカ国際私法の基礎理論』、『現代国際私法講義』(編著):『基本法コンメンタル 国際私法』、『現代国際取引法講義』、『国際知的財産法の潮流』、『国際関係私法入門(第2版)』

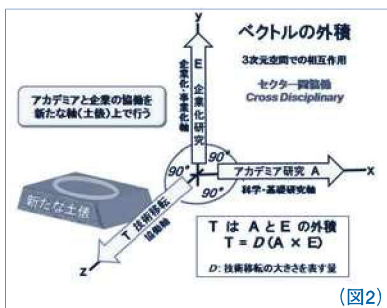
「内積と外積」 高尾 正敏 国際高等研究所フェロー・大阪大学大学院基礎工学研究科特任教授

アカデミズムでの科学技術研究の成果でイノベーションという声世界的に大きくなって久しくなりました。国の科学技術基本計画でも大きなテーマになっています。成果を企業化に繋げる技術移転の流れのなかで、選択と淘汰の必然性を象徴する単語として、「死の谷」と「ダーウィンの海」の存在があることが、米国のイノベーション促進議論の過程で示されました¹⁾。日本にはその概念が輸入され、如何にその隘路を克服するかが、重要な科学技術政策となっています。実はこれら谷と海は、広がりのない一次元モデルとして描かれます。概念としては、それで良いのですが、本質はそれほど簡単なものではありません。

アカデミア活動のベクトルA(x軸上)と企業活動のベクトルE(y軸上)は、図1に示すように、基本的に直交しています。即ちベクトルの



内積(A・E)を取るとゼロということです。物理のことはでは相互作用エネルギーがゼロということで、ゼロの場合、技術移転とその後のイノベーションは生じないことになります。ならば、それぞれのベクトルを互いに近づく(相手に興味を持つ)ように回転させて、相手の方向の成分a、eを取ることにしても、それらもまた直交してしまいます(図1右上)。同じ平面内でお互いに興味を示すだけでは、「谷」と「海」が現実化し、それで終わりです。ならどうするか。図2に示すように、x、y軸と直交する新たな技術移転(z)軸を設けることにします。この軸はアカデミズムと企業から等距離にあり、それぞれのアイデンティティを損なわないので、この軸上にお互



いの興味を射影すると議論が進むはずですが。

z軸上の技術移転ベクトルTは、数学のことで、 $T = D(A \times E)$ と書くことと便利です。ここで \times (クロス)は外積を表します。Dは技術移転の大きさを表す量です。この考え方の本質は、新たな技術移転軸を導入し3次元空間にしたことです。z軸は、新たな土俵でもありますが、その上で議論を深め、新たなコンセプトが見えてくるのが期待されます。アインシュタインは3次元に時間軸を加えて時空を議論しました。Tの大きさはA、

Eのそれに比べると、桁違いに小さいと推測されます。なぜならA、Eがそれぞれ確固としていないと、技術移転がうまく行かないのが自明だからです。小さくとも新たな方向が見えてくるというのは非常に重要なことです。

このコンテキストは、基礎と応用科学、物理と化学、人文科学と自然科学と言った、異なる分野(セクター)間の関係にも当てはまります。つまり外積はCross Disciplinaryそのものです。z軸、土俵を用意して、新規なTベクトルを数多く作りだすというのは、高等研のミッションです。私自身高等研で足かけ10年勉強させていただくことができました。その中で私のバックグラウンドの固体物理に加えて、化学、エレクトロニクス、機械のほか人文・社会科学の先生方に教えを頂いたことで、ささやかなTベクトルをいくつか見つける事ができたと思っています。

参考:1) <http://www.atp.nist.gov/eao/gcr02-841/contents.htm>



自宅にて

・略歴:

1948年生まれ、1972年3月大阪大学基礎工学部物性物理工学科卒業、1974年3月大阪大学大学院基礎工学研究科修士課程物性学専攻修了、1977年3月大阪大学大学院基礎工学研究科後期課程物性学専攻修了・博士(工学)、1977年4月松下電器産業(株)入社、産業機器研究所・中央研究所・本社経営企画室、研究本部、松下技研(株)取締役新素材研究所長、先端技術研究所、中尾研究所を経て2008年10月パナソニック株式会社(松下電器)定年退職、2008年11月(財)国際高等研究所フェロー(2009年11月)、2009年4月大阪大学大学院基礎工学研究科特任教授

現在に至る

・専門分野:

固体物理、磁気記録メディア、光記録メディア

・主な受賞:

文部科学大臣表彰:「科学技術分野」「開発部門」2005.4.20

・主な著書:

「ビデオレコーディングの話」裳華房 1989年

共著「分子エレクトロニクスの基盤技術と将来展望」第II部第4章シーエムシー出版 2009年

研究代表者：鳥海 光弘

高等研企画委員/東京大学大学院新領域創成科学研究科

2009年度の長期ワークショップは9月5日から11日にかけて開かれた。約30名の社会学、哲学から医学、生物学、地学、プラズマ科学、統計力学などの分野の研究者と大学院生が宿舎に寄宿しながら、午前中は教員のレクチャーを中心に、午後は若手および院生の発表と、任意のチームでの研究会討論を行った。

今年是最終年度にあたり、隙間の組織化について議論を集中する方向で開催された。そのため、あらかじめ幹事会での討論を経て、いままでに討論された階層性や相互浸透、共時性と通時性などの事柄に関して具体的な現象からの詳細な展開をおこなった。その内容は、哲学からの考察については長い考察の歴史をもつ自己同一性に相補する隙間の考察をメルローポンティとドルーズから議論し、アリストテレスのダイアステマ概念の検討をおこなった。

一方、社会学からは主体と主体を補完するコプレゼンスの存在をどうして隙間が組織化され、主体とそれを取り巻く社会の多様性が生じることが指摘された。さらにプラズマ流体での渦と階層性の統一としての隙間の組織化が提起され、やはり、自然的対象での実体と相補的なものとのコプレゼンスのさまざまな変容が多様な運動を励起する様相が指摘された。

自然過程については、より複雑な現象が物理的なリアリティを獲得するうえで、時間順序的なモデルの連結が必要で、そのこと事態は通時的な自然過程が共時的な世界に転換できないことを示すという指摘がされた。このようにして、今回のワークショップでは人文科学的な概念の検討と理学的なそれとの交差する研究討議が進んだ。

今回のテーマは人文科学的な検討を中軸にして隙間の新展開を目指したため、若手や大学院生がこのような文理融合的な討論にどのように対応

できたか、を知るために吉田研究室の江本さんにワークショップについてまとめてもらった。以下に江本さんのまとめを紹介しよう。

「今回初めて隙間の組織化プロジェクトに参加させて頂きました。今回のプロジェクトでは大きく分けて2つの感想を持ちました。



国際高等研究所中庭



ワークショップの様子 セミナールーム1にて

1つは、隙間という言葉がこうして主題化されるほどに、科学の大枠が整えられつつあるのだと言うこと。一昔前までは、例えば数学で言えば線形の問題、社会学で言えばトップダウンの政策など、先ずは骨子となる、一番単純化された対象に、科学の焦点があてられていたことだと思います。今回のプロジェクトでは、隙間という呼び名に表現されるような、かつては科学意識の外枠に位置していたような対象にこそ焦点をあてていた訳ですが、そのような動きに、次世代の科学への萌芽なるものを感じました。細部に目をつぶり、言わば粗視化された世界を扱うにとどまっていた段階から、解像度をあげ、あるがままの世界に手を伸ばす段階まで科学が成長してきたのだという実感を得ました。

もう一つは感じたことは、今回のプロジェクトは多分野の科学者の合同で行われたのですが、分野によって言葉に対する感覚が随分と異なるということ。もう少し正確に言うと、自然言語に対する態度が、分野によって、時には真逆だと思えるほど異なるのだと感じました。例えば理系の方は、自然言語の他に数学と言う非常に鋭い伝達手段を持っています。ここで鋭いと言っているのは、誤解する要因が少ないという意味です。そういう、鋭い伝達手段を持っているからこそ、自然言語を使う時は非常に大胆な比喻を使ったり、また要点のみをついた話し方ができる。これは、基本的なことは数学言語で伝わっているという安心感があるからなのだと思います。一方で、例えば哲学の方などは、まず一つ一つの言葉の定義と言う細部から話が始まり、また、不用意な比喻は用いないと感じました。比喻は、確かに分かりやすいのですが、その含みの広さゆえに、誤解を生じたまま議論が進行してしまう危険があるからなのだと思います。自然言語と言う、もともと軟らかな言語を、伝達の主とする故に、繊細な主題を扱う際には細心の注意が必要となります。それぞれに鋭さなり軟らかさなりの利点があるのだと思います。

他分野の方と議論をする際には、各々の分野で普段どのように自然言語を扱っているかを明確に意識し、その差異に注意を払うことが、実りある議論を成すための第一歩なのだと感じました。」

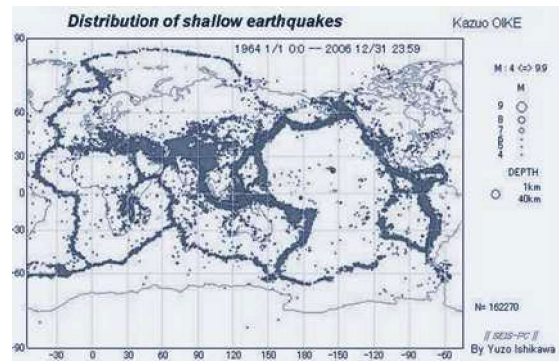
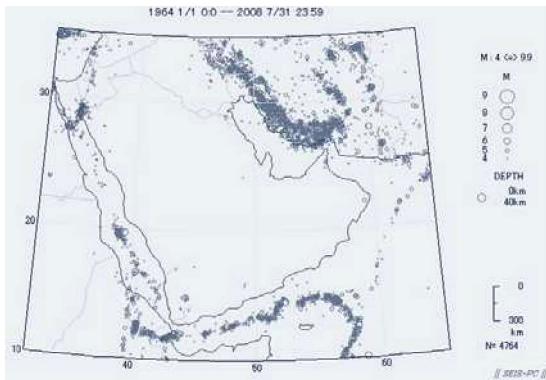
江本伸吾 東京大学大学院新領域創成科学研究科 大学院生(吉田研究室)



懇親会

サウジアラビアへの旅

2009年9月23日 Jeddah KAUST 9月26日 帰国



■サウジアラビアはアラビアプレートの中にある大規模な石油産出国です。紅海に面して新しい大学が生まれました。



今の国王 King bAddallah にお目にかかったときの写真です (KFUPMのサイトより)。



この写真の向かって右端がKAUSTの学長になった Choon Fong Shih さんです。



私は今、ダーラン (Dhahran) にあるKFUPM (King Fahd University of Petroleum and Minerals:キング・ファハド石油鉱物資源大学) の International Advisory Board (国際アドバイザーボード) のメンバーです。

その関係で、新しいこの大学の開設式に招待されて、参加してきました。

■サウジアラビアで2番目の大都市Jeddahから北へ車で約40分の所に新しい街が作られ、そこに生まれた新しい大学なのです。

大学名

King Abdullah University of Science and Technology (KAUST)
Strategic Research Thrusts

次のような分野があります。

Resources, Energy, and Environment
Biosciences and Bioengineering
Materials Science and Engineering
Applied Mathematics and Computational Science

9月23日の式典会場です



式典のためのテントです。3000人の参加者だそうです。



会場内の雰囲気



新しい都市のジオラマ



王様のスピーチ



Choon Fong Shih 学長が力強くスピーチしました。



アラビアで初めての男女共学による
大学院大学の誕生です。



式典会場の様子



食事はおいしくいただける国です。



お酒はありません。
ノンアルコールビールです。



帰りのカタール航空機の窓からは、天山山脈の氷河が見下ろせました。



西南日本の変動帯の景色を見ながら、
関空に帰りました。



■この新しい大学は世界の研究者たちと協力を進めます。
国際高等研究所の皆さまも、大いに連携をすすめてほしいと思います。

2009年5月23日(土)に開催した高等研公開講演会の講演内容を基に、高等研選書22(著者・尾池和夫国際高等研究所所長)をこのほど刊行しました。

本書では地震学の専門の立場から、基礎的な知識から防災の心得までを分かりやすく解説しています。京阪奈地域の地学的な立地条件の説明を始め、地震が発生時の心構え「グラッときたら、身の安全」が防災の基本であることなど、一般の方々に大変分かりやすい内容となっています。

以下、本書の「はじめに」を転載します。

……1995年1月17日未明に兵庫県南部地震が起こりました。その地震による震災を阪神淡路大震災と呼びます。大都市を襲った直下型の地震は、死者6437人、経済的被害10数兆円という未曾有の災害をもたらしました。甚大な被害もさることながら、震災を機に一般の人々の防災に対する理解が進み、ボランティア精神の大切さが認識されるなど、日本の社会に多くの教訓を残しました。

震災の約20年前(1974年)に神戸市で出版された『神戸と地震』という報告書があります。神戸が影響を受ける地震について述べています。100年に一度ぐらいの南海地震、これは繰り返してやってくる。また、近辺の活断層が動いた際には震度5程度(当時の震度階は0～7の8ランク)で揺れるだろう。ちなみに、活断層という用語が自治体の報告書に入ったのは、これが初めての例です。そして、直下型地震の可能性も挙げて「壊滅的な被害は免れない」と断定的に書いてあります。報告書づくりに私も参加しましたので、よく覚えております。しかし、公表はされませんでした。

震災を機に、活断層の調査や観測網の整備など、地震への備えはかなり進みました。扉の日本地図をご覧ください。地震調査委員会が、今後30年以内に震度6弱以上の揺れに見舞われる確率を図示したものです。震度6弱は、0から7まで10ランクある震度階の上から3番目の揺れで、大きな被害が予想されます。その確率26%以上、これは「ほぼ間違いなくやってくる」と理解すべき数字なのですが、本州では神奈川県から高知県までの太平洋沿岸に帯状に広がっています。東海・東南海・南海の各巨大地震で最も強く影響を受ける地域でもあります。確率3%以上となると首都圏や近畿地方中部、四国全県へと拡大します。確率3%は、結構高い値なのです。さらに日本全土を見てみますと、一部を除いて0.1～3%の「やや高い」地域として塗りつぶされています。どこで

も揺れるのが日本列島です。しかも、確率の高い地域に人口の大半が住んでいます。地震とはどのような現象なのか、なぜ日本に地震が多いのか、さらには危険な場所に文化や経済が栄えたのはなぜかに思いを広げ、万一へ備えてもらえれば、と思います。……



● 高等研選書22

地震を知って震災に備える～京阪奈地域を中心として～

- ・著者:尾池和夫 国際高等研究所所長
- ・サイズ/B6
- ・頁数/104頁
- ・価格/1,000円(消費税込み)
- ・ISBN978-4-906671-57-1

本書にご関心のお持ちの方々に是非一読お薦めします。

なお、本書のお申し込みはコピーマート研究所
(TEL/075-315-9923・FAX/075-315-9368)まで。

高等研は従来のWEBサイトを大幅にリニューアルした改定版を10月1日(木)にリリースしました。

今までの暫定的WEBサイトの運用を踏まえ、今回のWEBサイトは、当研究所の財団運営及び研究活動とも、ご利用の皆様へ高等研が「分かりやく」、サイトの使いやすさを追求しました。

リニューアルサイトは、「高等研の紹介」、「研究事業」、「学術情報出版」、「広報活動」、「情報公開」の5つで構成しています。

また、当研究所の「交通アクセス情報」を掲載した携帯サイトも同時にオープンしました。

今後はご利用いただく皆様にとって、更に使いやすく便利なサイトになるよう未整備のコンテンツも順次増強させ、成長させていく予定です。

研究プロジェクトの紹介に加えて、隔月で発行しておりますIIASニューズレター、研究成果を取りまとめた高等研選書及び高等研報告書刊行のお知らせと入手の方法等も掲載。更に公開講演会等のイベント情報、所内の施設や自然の移り変わりも分かりやすく紹介しています。

ご覧いただき、ご感想ご要望などをメール(www_admin@ias.or.jp)でお寄せいただければ幸いです。

<http://www.ias.or.jp>

●リニューアルサイト(トップページ)



●携帯サイト画面



●研究活動(10月1日～12月31日)

■開催予定日	■研究プロジェクトのタイトル	■研究代表者
10月2日(金)～3日(土)	エネルギー科学における多階層連結コンピューティング	三間 園興
10月15日(木)～18日(日)	生物進化の持続性と転移(国際ワークショップ・京大共催)	津田 一郎
10月16日(金)～17日(土)	2009年度第2回企画委員会	尾池 和夫
10月23日(金)～24日(土)	18世紀における世界観の多次元的交錯	石川 文康
10月23日(金)～24日(土)	近代精神と古典解釈:伝統の崩壊と再創造	手島 勲矢
10月23日(金)～24日(土)	グローバリゼーションと市民社会	仁科 一彦
10月29日(木)～30日(金)	文化財保全技術(国際シンポジウム)	志水 隆一
10月30日(金)～31日(土)	メタマテリアルの開発と応用	石原 照也
10月31日(土)	細胞履歴に基づく植物の形態形成	鎌田 博
11月7日(土)	フェロー研究会「京大地球物理学研究の百年(その2)」	竹本 修三
11月13日(金)～14日(土)	受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合	ジュリー ブロック
11月14日(土)	21世紀における文化としての設計科学と生産科学	岩田 一明
11月14日(土)～15日(日)	すきまの組織化	鳥海 光弘
11月27日(金)～28日(土)	近代精神と古典解釈:伝統の崩壊と再創造	手島 勲矢
12月1日(火)～2日(水)	天地人-三才の世界:宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいイテラシーの創造	尾池 和夫
12月5日(土)	絵画と文学に表象される、時間と空間の脳による認識(於:大阪大学)	近藤 寿人
12月12日(土)	ナノ物質量子相の科学	金森順次郎
12月18日(金)～20日(日)	宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略	海部 宣男
12月25日(金)～26日(土)	研究成果の取りまとめ会合「19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究」	吉田 忠

●公開講演会の開催

■開催日	■講演テーマ	■講師
2010年2月20日(土)	公開講演会「核なき世界を生きる～トリウム原子力～」	亀井 敬史 京都大学生存基盤科学研究ユニット助教



お・知・ら・せ

車椅子を購入しました。

高等研が開所して16年が経ちましたが、これまでに研究会参加者や講演会来聴者で、車椅子で来訪されたケースが何回もあり、所内のバリアフリー対応が功を奏したことがありました。

一方、これまでは所内に車椅子を準備しなかったことで、来訪者にご不便をおかけしたことは幸いにもありませんでしたが、このたび、万一の場合を想定し、車椅子を一台ですが購入いたしました。

来所時に、突発的なことで車椅子が必要になった場合にはご利用いただけますので、事務局にお申し出ください。



※お詫びと訂正 IIAS News LETTER 67号(August 2009)掲載記事で誤記がありました。
お詫びとともに次の通り訂正させていただきます。9ページ:報告 施設見学・来訪者記録「浅川美鈴助教他→浅利美鈴助教他」

編集・発行者

財団法人 国際高等研究所

事務局長 佐藤 行則

〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地

TEL: 0774-73-4000 FAX: 0774-73-4005

http://www.iias.or.jp